

# Azalea

アゼリア

特集

わたし、もう一度働きます



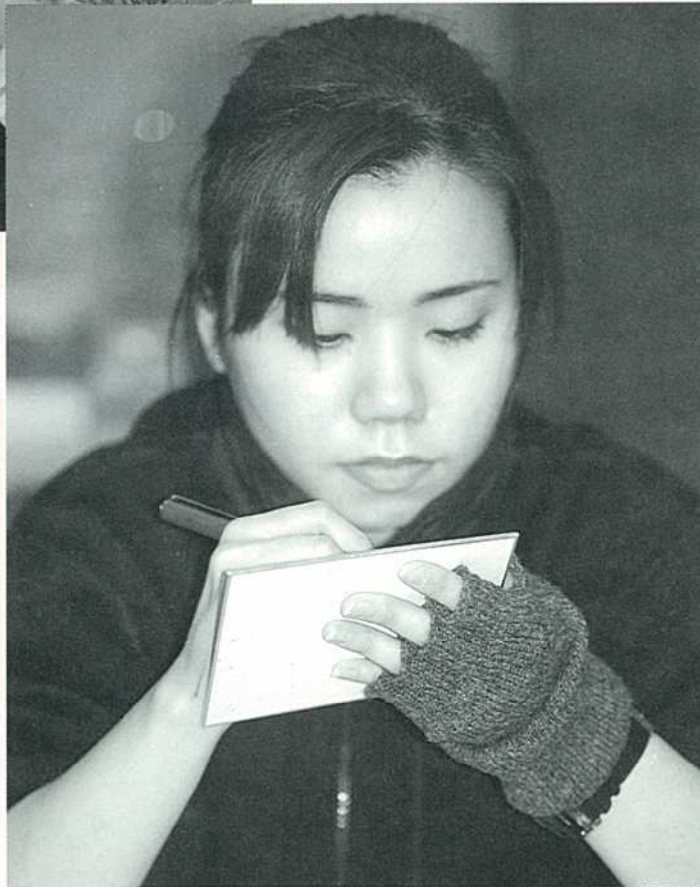
# 特集

## わたし、もう一度働きます

働く人の4割は女性です。  
それでも、女子学生の就職は厳しく、既婚女性の再就職も苦戦中。  
バブルの後の不況でこれまでの元気も飛んで行ってしまったのかしら？

いいえ。困難な状況の中でも、自分なりのペースで着実に歩んでいる女性たちはちゃんといます。北区に在住・在勤の10人の女性の「私の再就職」を取材しました。

女性にとって働くことって…。



# チャレンジ再就職

母の筋肉

かつて  
OLだった  
ころは

10年前

笑顔が売り。

負けしてしまった

ゼータクは  
言ってらんない  
ですね

35才なら  
さうでも  
ありません

ハローワークにて

就職

試食販売員になった

い、今は…

△△株式会社  
面接会場

あなたの  
セールスポイントは？

腕っぶし！

二児の  
母ですからっ

あーら  
食べてって  
よー

あたしも  
再就職したの  
よーっ

ウインナは  
売れず

おナベを  
しこたま  
買わされた

みたいです

それだけ？

田島 加代子

陽気な  
アゼリアさん  
vol. 5 再就職戦線異常あり！の巻

男女雇用機会均等法

「禁止規定」

- ◆定年、退職、解雇 ◆教育訓練
- ◆福利厚生 の男女差別をしない。

「努力義務」

- ◆募集、採用 ◆配置、昇進 の(男女)均等な扱い。

この3つの禁止規定、2つの努力義務とも罰則規定は設けられていません。

「キャリアウーマン」が注目され、「アグネス論争」が巻き起こり、80年代は「女性の時代」と言われました。「国連婦人の10年」の最後の年、1985年には男女雇用機会均等法が制定されています。

それでも、女性が働く環境はまだまだ厳しい！



**仕事なしの人生なんて**  
会社員  
阿部 照美さん(63歳) 神谷在住

阿部さんが現在勤めている会社は、メジャー(巻き尺)のメーカー。自宅から歩いて5分の場所にあります。阿部さんの職種は事務別の会社の事務員だったのですが、40歳の時社内の対人関係の難しさにグチをこぼしたところ、聞いていた夫が「仕事やめたら？」。それで退職したものの、少し家にいたら気がめいって食欲も失せ、何もできない状態になってしまいました。医者に行くと「体はどことも悪くない。仕事をした方がいいでしょう」。

学校を卒業してからずっと働いてきた阿部さんにとって、働くことはイコール生きるこ

とになっていたのかもしれない。失業保険をもらいに行った職安で今の会社を紹介され入社したら、なんと(19)10日で気力体力が回復。

「子どももいないし、家の中の仕事をしても張り合いがないじゃない。そこへいくと、会社の仕事というのは緊張感があって、今でも少しくらいカゼっぽくても治っちゃう」。

55歳の定年の会社ですが、阿部さんは引き止められ、正社員とほぼ同待遇の嘱託として在職しています。

「20年も働いてこられた理由といえば、仕事は遊びじゃないんだから、大変なのは当たり前。そういうふうには割り切ってやってきたか」。

近頃の若い人たちも、もうちょっと厳しい心構えで仕事に臨んでほしい——働く先輩としての阿部さんの、そんな気持ちがうかがえる言葉でした。



**生かし、続けた  
手縫いの技術**

ネクタイの縫製  
堀 幸子さん(50代) 上中里在住

堀さんは、結婚前に覚えた洋裁の技術を生かし、末っ子が幼稚園の時からネクタイの縫製を続けてきました。15年前、家の中でできる仕事を何かしたいと思っていたところ、子どもの遊び友だちの家で作っているのを見て始めたのがきっかけでした。

夫の両親、実父を順に介護し、見送って、今は施設で生活する実母の世話に通う日々ですが、仕事はずっと続けてきました。最初は自分一人でしたが、現在では仕事場を持ち、数人のチーフとしての責任を同時に負っています。

「子育ても介護も、いずれは終わります。その時、自分の手に何か実のあるものを持っていかれたのです。細くても長く続けられる仕事をし、それに対して責任を持ち続けてきたことが今までの自分を支えてきたと思います。また、これからもそうしたいと思っています」。

特集

わたし、もう一度働きます

まずは、踏み出してみる。家庭あり、特技なしの専業主婦には再就職の壁は厚い！不屈のチャレンジ精神が再就職につながります。壁をバネにしてチャレンジした方の奮闘・ノウハウをご紹介します。

仕事が出来たい

経済的な自立をめざして

井上 美根子さん(40代) 王子在住

井上さんは大学卒業後メーカーに就職しましたが、職場では補助的業務ばかりでした。そのため何か専門技術を身につけようと英文タイプライターを習いました。マスターが早い上、他人に教えるのがうまいため、その専門学校で講師に迎えられるようになりました。やがて、出産のため退職して専業主婦となりました。しかし帰りの遅い夫を待ち、子どもの他には誰とも話をしない日々には耐えきれなくなり、子どもが2歳になるのを待って、仕事を探し始めました。

夫は妻が働くことに内心反対のようでした。そこで、託児所付きの企業の仕事や地元のアースフード店でパートをするなど、まず



外に出てしまいました。今までのキャリアにこだわらず一からの再出発です。夫には、なし崩しに仕事をもつことを認めさせました。「妻が無収入だと夫は『食べさせてやっていい』という態度が無意識にでます。家庭内で夫と平等でありたかった。そのために経済力をつけたかったのも働く理由の一つでした」とふりかえる井上さん。

仕事は熱心にやるうえ、指導が上手なので、この職場でもやがてチーフ的存在になる井上さんは、途中でパートから正社員に変わりました。賃金・厚生面での待遇の違い、年金などの将来を考えたからです。その後誘いを受けた現在の会社には、最初から管理職の椅子が用意されていたというからすごい。

「様々な仕事を通じて自分が気付かなかった能力を引き出してもらえました。仕事をしたのちに躊躇して後悔するよりは、思い切った方がいいですよ」。

楚々とした風情でおだやかに語る井上さんの中に、きつちりと自立して生きる人間の確かなさを感じました。

役に立った

口コミチャンネル

会社員

荒川 照代さん(50代) 中里在住

荒川さんが再就職を考えた大きなきっかけは、夫の定年が近づいてきたこと。現在高校生の子の娘の教育にもっとお金をかけてやりたいと考えたからです。

結婚退職後は専業主婦でしたが、6年前に「自分の自由になる時間の中でできる仕事を」と下着類の訪問販売を始めてみました。しかし販売の仕事は難しく感じられ、自分には向かないと思えました。けれども、そこから新



しい一歩を踏み出すには少し時間が必要でした。

他の仕事を捜し始めたものの、求人仕事で35歳まで、販売も40歳、それを過ぎると限られたものしか見当たりません。それでも難しい求職に粘り強く取り組めたのは、振り返ってみると、これまでの「私」という枠に新しい何かを加えたい気持ちがあったからかもしれません。

求職中ということ周りに人たちに伝えて、まめに情報を集め、それに並行して、事務職であること、親の通院の付添いはしたい、etc……と自分の優先順位を整理していききました。そんな中、昨年9月に声を掛けていただいた知人から自宅の近くで事務職の募集があるという情報を聞き、応募。面接では仕事のこと、生活のことなど自分の考えを率直に話し、自分を理解してもらえたと思えました。そして採用。

現在は営業担当者が出はらった後、一人で事務所を預かるという臨機応変の対応が必要な責任のある仕事も任されています。真摯に仕事と取り組む中で、「自分を育てる働き方をしたい」と考える荒川さんです。

## 特集

### わたし、もう一度働きます

好きなこと、やりたいことならがんばれる！  
それを仕事に結びつけ、元気にのびやかに働く女性  
たちがいます。

#### 意欲と努力で目標を ゲット(ge-t)

給食主事

乙黒 園恵さん(30代) 上十条在住

乙黒さんの勤務先は区立小学校です。毎日子どもたちの「おいしかったよ」の声を励みに給食を作っています。

給食主事になろうと思ったのは、漠然とした夢のようなものではなく、自分の描いた設計図通り。末っ子が小学校に入学したら再就職し、その時は給食主事になると決めていました。得意の料理の腕を生かすことができ、「変わっていく食環境の中で子どもたちの成長



に重要な役割を担う給食にかかわっていきたい」というこだわりがあったからです。給食の仕事に一步步近づきたくて、レストランのパートの仕事をしたほどです。

3年前、区の試験を受け、30倍近い倍率のなか見事に合格。念願の給食主事になることができました。体力テストもありましたが、ママさんバレーで体を鍛えていたことが役に立ったそうです。

「何よりもやりたかった仕事ができ、毎日が充実感でいっぱいです」と乙黒さん。

3人の子ともたちも、いきいきと家事や仕事をこなす乙黒さんを応援してくれています。

#### 私のケーキをつくりたい

ケーキ職人

田中 時子さん(40代) 西が丘在住

お菓子作りが好きで、本を片手にケーキを作るという趣味を持っていた田中さん。もつと凝ったケーキを求めて、3年前に製菓学校に入学してしまいました。週に2日の学校とそれまで続けてきた電算写植(ワープロ)の仕事で、授業料も自分で稼ぐ忙し日々でしたが、昨年、2年間の課程をようやく終えました。

学校ですべてにプロとして仕事をしている仲間も多く、ケーキ作りに多少の自信を持っていた田中さんも、趣味のケーキ作りとプロ



との違いに愕然としたそうです。若い人たちと同じ力仕事も、身体にこたえました。でも製菓学校で学んだ甲斐があつて、今はケーキづくりに失敗した時も、その理由がはっきりわかるようになりました。

現在は、某洋菓子店で仕事をしています。クレープにクリームをぬり、またクレープを重ねて20層にしたケーキを作っています。

そして、田中さんは美味しさにこだわったオリジナルケーキを、自宅から宅配する仕事も考えているところです。

「目的をもって働くところを子どもたちに見せたい」、これが田中さんの現在の目標です。

#### いつか来る日のために、 今できることを

登録ヘルパー

植地 敬子さん(50代) 北区在勤

植地さんは友禅染の模様師を仕事としたり、パッチワークの先生をしたりと、クリエイティブな分野で働いてきました。

その中でホームヘルパーをしようと思ったきっかけは夫の入院でした。幸い病状は軽く、介護という問題に向き合わずにすみました。

しかし将来的には介護を体験しておいた方が良いと思います。区の3級ホームヘルパーの講座に通いました。終了後、北区の登録ヘルパーとして、週3日10時間の仕事を始めました。仕事をしていく中で、ヘルパーは単なる家事援助ではなく、話し相手になったり、心のケアにまで対応しなくてはならないので、片

手間ではできない仕事だということが身をもってわかりました。さらに研鑽の必要性を感じて2級、1級と受講し、昨年は難関の介護福祉士の資格に合格しました。

現在は派遣された家庭で、「お年寄りが毎日を楽しく、そしていかに長く自宅で生活していただけるか」をめざしながら仕事をしています。

いつも優しい笑顔の植地さんはとても聞き上手。「お年寄りには人生の先輩。教えられることが多く、楽しい時間です」と話してくれました。

#### 英語が好きだから

英語塾経営

富田 靖子さん(50代) 志茂在住

「私は、好きなことと仕事がぴったり一致しているんです。」

現在英語教室の講師として、20数名の生徒を自宅で教えている富田さんの前歴は、スチユワーデス。結婚退職後、生まれた最初の子どもがわずか2カ月の時、近所の中学2年生の少女に英語を教えてほしいと頼まれたのが、今の道に進むきっかけになりました。

当初は授業といっても、こたつで赤ちゃんを抱きながらのアットホームなものでしたが、25年たった今では、教室専用の部屋を作り、留学生の先生を招いての英会話の授業も行っています。

「料理中にもテープを聞いたり。でも、それはmusic(しなければならぬ)じゃないんですね。英語が好きだから。」

「人に教えるためには、教える側が充分に理解している必要があります。だから、授業の準備は一仕事。生徒の成績が上がるように、一人ひとりに合わせた指導のやり方も工夫しなければなりません。でも、緊張感が充実感を生んで、それがまた「ハッピー」と、さわかき言い切る富田さんです。

#### パートで働くということは

パートでしか就職が難しいという女性の再就職の状況もあって、現在、働く女性の3割はパート労働者です。その職場の悩みのトップは「賃金が安いこと」。昇給、諸手当の支給、一時金の支給、退職金の支給などで、正社員との差が少なくありません。また、社会保険(健康保険、雇用保険、労働災害保険、年金)への加入も進んでおらず、労働基準法で保証されている年次有給休暇が「ない」場合も50%にのぼるなどの問題もあります。

けれども、一方で、年収を103万円までに抑えることで、既婚者では夫の賃金に配偶者手当がつく、配偶者控除が使える、保険料を出さずに済むという恩恵があります。家事との両立も考え、あえてパートで働くことを望む人も多く、パート労働者にも「望んで組」と「やむを得ず組」があるといえます。

不況の中で、そうしたパートの労働時間、労働日数、残業時間の削減や、安易な首切りさえ行われているのが現状です。

正社員と同等の仕事をするパートや期間限定の派遣社員が増加し、また、一般社員と変わらない労働時間で働いている「フルタイムパート」も登場して、パートや派遣社員が「便利で安く使える存在」とされていることは否定できません。

「パート労働者は正規労働者と比べて短時間である以外は均等である」という原則が、ILOパート条約にはうたわれています。しかし、残念ながらこの条約は、日本ではまだ批准されていません。平成5年に成立したパート労働法の、この条約にそった形での改正が望まれます。

参照：婦人白書1995(日本婦人団体連合会編)  
婦人白書1996(日本婦人団体連合会編)



# 自分探し

納得できる生き方を求めて

女性のM字型就業

まずやってみる…  
めげずにチャレンジ

カレー店経営  
小林 恵子さん(40代) 西ヶ原在住

「娘時代から、いつかは自分でお店をもちたいと思っていました」と話す小林さんは、子育てが一段落した時、周囲の援助もあって小物の店を開きましたが、うまくいきませんでした。それで、今度は少し無理をして、カレーと紅茶のお店を開いたのが一昨年の10月のこと。

仕事をすることで夫から自立し、子どもに必要な以上の口出しをしなくなりました。翌日のための仕込みに忙しい小林さんの代わりに、夫が買物に走ってくれたり、子どもたちも進んで家事を分担してくれるようになりました。「先のこととはあれこれ考えずできることをまず実行して、出た結果を修正してきて、いま現在があります。儲けは二の次、仕事を楽しんでいきます。小さいけれど、ここは私のお城です」と言う小林さん。

背中聞こえるのは、サラリーマンの夫の一言『やるね、君は』だそうです。



高校教師  
金子明日香さん(仮名)30代 王子在住

金子さんは高校時代、アメリカ留学を経験しています。短大卒業後、丸の内0.Lに。しかし、仕事の中身は男性の補助ばかり。結局、半年で退職して、大学3年に編入学しました。その後、中学校の教師になりますが、夫がアメリカへ留学するという事態がおこります。そこで、金子さんも試験を受け、幸い奨学金を受けることができたので、ともに留学することになりました。教師を辞めての渡米です。

アメリカの大学で、はつらつと勉学にいそしんだのち、学生のまま帰国しました。通訳をしながら大学に提出する論文の準備をしていましたが、まわりの女性たちの働き方を見ていて考えてしまいました。

「パート的な働き方をしていたら、いざという時家族を支えきれない。喧嘩をしても『誰に食べさせてもらっているんだ』といわれて、言葉をのみ込む女性が多い。私はどんなことになっても、生きていけるように、そして夫とは対等な関係でいたい。自分で責任をもつ暮らし方をしたい」。

そこで、自己をじっくりと見つめ、自分の適性はやはり教師だと考えました。「もう一度教師に！」その思いを胸に、採用試験突破に向かって努力の日々を重ねます。その甲斐あって、2度目の挑戦でめでたく高校教師になりました。

「試行錯誤の経験は、いまは授業で役立っています。女子生徒の後押しができれば…。また、女性たちが働きやすい環境をつくっていくことに関わっていききたい」と瞳を輝かせて語る金子さん。ファンの生徒も多いのでは…。

## 特集 わたし、もう一度働きます

「私はこう生きたい」とじっくり考える時期は、人それぞれに違います。真剣に自分と向き合ってたてたプランでも、壁にぶつかるたびに、練り直しを経験してきた人もいます。

# なぜ再就職なの？

今回の特集は、それぞれの持ち味を生かして働いている10人の女性たちにお話を聞きました。

身近に働く女性が増えたのは、いつのころからでしょう。クリーニング店の受付、スーパーのレジなどで働く主婦と接することも、気が付いたら当たり前になっていました。

## これまでの女性たちは

昭和30年代からでしょうか、都会で暮らす核家族、サラリーマンの夫とかわいい子どもに囲まれて家庭を守ることが、女性の幸せと

されてきたのは。それまで大家族の中の嫁として、家事も仕事も(農業など、家業といわれる仕事が多かった)やっていた女性たちにとつて、それは、過酷な労働と家制度から逃れ得た幸せとして見えていたと思います。そして、家庭を守る女性と稼ぎ手の男性という家庭内の役割分担が、その後の高度成長時代を支えてきました。

いま、かつてのあこがれの生活を手にいれられなくなっている女性たちが、自立した一人の人間として「仕事をしたい」と願っています。

家の中を守る主婦という従来の枠の中で幸せと思え、またはそう思い込まされてきた女性たちが、社会の中で仕事を通じて自分を表現しながらよりよく生きたいと願い始めています。男性や社会の変化よりも先に、女性が変わったのだと思います。

## 女性たちの望むもの

この特集を企画し取材を進める中で、10人の女性にインタビューをしましたが、みなさん、何ごともなかったかのように生き生きと輝いていました。

しかし、働き始めるにあたって周辺に派生する問題については、全部個人のガンバリで解決してきたこと、また、過去の経歴にこだわらずにチャンスを生かしてきたことなど、困難を乗り越え現在に至ったという共通する体験を持っています。再就職にあたって迷ったことは、無駄ではありません。必ずプラスになりました。

特集に登場するみなさんだけでなく、女性たちが大変な思いをしてまで再就職をしたいのは、一人前の人間として認められたい、自分自身を生かす生活をしたくないからではないでしょうか。この特集を、「私にとって働くことって何だろう」と考えるきっかけに使ってほしい、そして、現在厳しい状況の下で働いている・働きたいと思っている女性たちを応援したいと考えています。

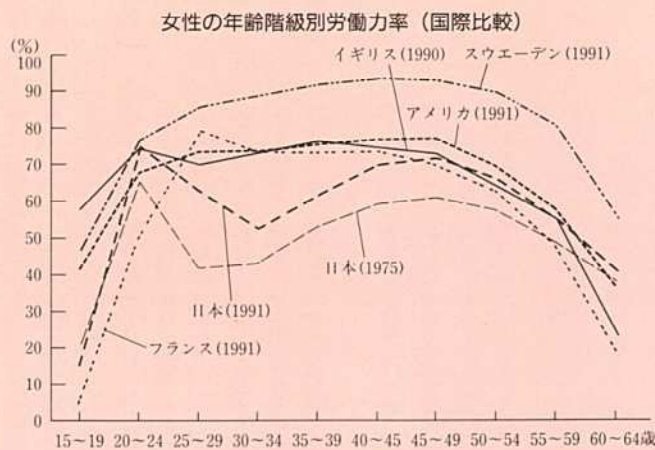
## 新しい変化

景気の低迷と低成長で、これまでは当たり前とされていた終身雇用制度が見直されています。年齢と共に給与も上がる年功序列から、個人の能力を重んじる能力主義の制度へ切り替える動きもあって、高賃金の中高年の男性社員の肩たたきや賞金の見直しが行われています。

生活の保障を与えてくれた「会社」に頼れなくなる厳しい時代への移行とも言えるこの動きは、年功序列の枠からはずされていた女性にとってはチャンスとする見方もあります。

これからの少子高齢化社会では、「女性の労働力がより必要とされる」といわれています。その中で、日本女性のM字型就業も、かつてはM字型だったスウェーデン、アメリカ、イギリスなどの欧米諸国のように変わっていくのでしょうか。

こうしたことを含めて、今回は積み残したいろいろな問題を、これからの号で取り上げていきたいと思っています。  
あなたの意見をお聞かせください。



就職はしたものの、出産・育児のために退職する女性は今も少なくありません。女性の労働力率は20〜24歳を頂点に減り始め、30〜34歳では最低に落ち込みます。その後、子どもに手が掛からなくなると再び働き始めて上昇。45〜49歳に2番目の頂点がきて、その後は下降。

こうした日本女性の労働力率を表す折れ線グラフの中ほどにほみのある形が、アルファベットのMの字に似ているので、「M字型就業」と呼ばれています。

国際比較図にあるように、スウェーデン、アメリカ、イギリス、フランスのグラフは台形に近く、出産・育児期においても高い労働力率となっていることを考え合わせると、日本での育児休業法の普及や保育制度の充実はまだまだといえます。

※労働力率(15歳以上の人口に占める労働力人口の割合)

注: スウェーデンの区分のうち、「15-19歳」の欄は「16-19歳」として取り扱っている。  
資料出所: ILO "Year book of Labour Statistics 1992"



# 私は都電の運転手

堀口 由香利さん  
王子在住



東京都の交通局では、平成4年から、それまで控えていた運転手職員の募集を始めましたが、平成8年までに応募した女性は、全部で7名だったそうです。今回は、平成7年に運転手として採用された堀口由香利さんを訪ねて、『荒川電車営業所』に伺いました。

## 早起きには慣れました

堀口さんの一日の始まりは、その日によって違います。勤務にローテーションが組んであって、休みの翌日が午後からの勤務。それからだんだん早い出勤時間になって、早朝5時半からの始発勤務の時は起床が4時です。職場まで自転車10分という恵まれた通勤距離ですが、真冬のこの時間は未だ夜明け前です。

早稲田、三ノ輪橋間は片道約50分。休憩は、昼食時と間に2回、10分程度を車庫でとりまです。

「私が実際に運転したのは、平成8年の2月初めからです。早起きは大変ですが、もう慣れました」

車輛を停車させる時が何より難しいという

ことで、毎日を運転技術の向上に心がけている堀口さんです。

都電の平均時速は15キロ。無人の踏み切りばかりなので、線路の上を歩く人や、猫が入ってきたりするとドキッとします。すぐに警笛を鳴らすのですが、警報機が鳴っていても車が入ってくることもあります。営業所とは常に無線で繋がっているの、万一の場合はその指示に従って対処することになっています。

また、乗ってきた途端に「女の運転手さんで大丈夫？」と声をかけて聞く年配の女性や、夜間はかりでなく早朝の酔っ払いもお客の内の一人なのでとても困ります。こんな時は、乗務員として毅然とした態度で対応します。

## 運転手誕生まで

王子で生まれ、一時期を除いてはずっと地元で過ごした堀口さんですが、小さい頃から都電の運転手に、と想っていたのではありません。たまたま自にした募集広告がきっかけでした。

「特に活発だったという訳ではありません。スキーや旅行の好きな普通の女の子でした。ただ、動機に出るなら、男性と同じ仕事がないという希望は持っていました」

就職活動を始めた時、学生時代の勉強とは関係のない世界でまず自分を試してみようと思っただけです。

堀口さんの進路について、両親は「受け止めたのでしょうか。」

「運転はお客の命を預かる仕事だから、軽い気持ちで就職するのはよくない」と言っただけは父親。

「真面目に考えてのことなら、人と変わった事に挑戦して頑張るのもいいわね」と励ました母親。どちらも、一人っ子の堀口

さんをおつ気持ちからの助言でした。

交通局の都電運転手採用試験は、一次は筆記。初め3名程いた女性受験者も、二次の面接では堀口さん一人になりました。

「時間的な労働条件が厳しいですね」「入れば男性と同じで、加減はしません。やっぱりできない」では困りますが、そのころはいいのですか？

これまで男性の職場と思われてきた所へ飛び込む堀口さんへの周囲の関心は、続けられるかどうかの一点に集中したことでしょう。

「はい。そのつもりで受けました」と力強く面接官に答えた堀口さんです。

平成7年9月に採用が決まり、早速、江東区東雲にある交通局の研修所で、車輛に関する知識や交通法規などの学科を3か月間学びました。そして次の3か月間は、荒川電車営業所で運転技術の実地訓練。女性は自分一人だ、などと意識する暇のない緊張感を持って臨んだ研修期間でした。

平成8年1月末に研修が修了し、同期の男性6人と共に、都電運転手としてひとり立ちしました。

「今は仕事が楽しいです。更衣室も別に用意していただきましたし、女性の運転手ももっと増えて欲しいです」

とにこやかに話す堀口さんです。

## 将来は

東京に唯一残った路面電車に、初の女性運転手さんが誕生して一年。都電荒川線の一日の乗降客は約6万5千人です。一車輛を一人で責任を持ち、たくさんのお客を乗せて運転している堀口さんは、そんな気負いなど少しも感じさせません。「結婚しても、この仕事は続けます」と迷いなく語る堀口さん自身の歴史が始まるのは、まさにこれからです。

第3期の北区女性海外派遣団員に選ばれた10名は、5回にわたる事前研修で、この事業の目的並びに訪問する中国北京市の実情を学び、その責任の重大さに身のひきしまる思いで、10月21日、成田を出発しました。今回の訪問では、三つの視点に絞って視察・交流をいたしましたので、その概要をご紹介します。

## 男女共同参画社会実現のための女性の取り組みについて

北区の友好都市である、北京市東城区の人民政府(区役所)を表敬訪問しました。続いて宣武区婦女連合会と交流しましたが、女性の権利保護等については、政府が婦女連合会の活動を通して政策の実現を図っていること、家庭内での男女平等や家庭の質の向上のために表彰制度(優れた家庭)や「モデルハズバンド」などを設け、成果をあげていることなどが分かりました。

さらに、調査・研究を重ね、新たな試みに取り組んでいるとのことでした。

また、中国婦女発展基金は、民間から募った基金をもとに、貧困地域の女性の支援活動を行っている組織ですが、中国初の女子大である中華女子学院を設立したという話を伺いました。社会の需要に沿った人材を養成しているとのことですが、いずれ各界を担う女性たちが巣立っていくことでしょう。

## 一人っ子政策と教育問題

一人っ子政策が普及した結果、過保護で、子どもを中心にすべてが回ることから、子どもを「小太陽」とか「小皇帝」と呼んだりするようになったそうですが、北京市第15中学の子どもたちは、授業態度も良く、先生

## 第3回北区女性海外派遣事業

# 北京を訪ねて

第3期北区女性海外派遣団 団長 木村 美紗子

の言うことを素直に聞いているように見受けられました。ここは、日本でいう中高一貫教育で、大学への進学率がほぼ100%。中国でもトップクラスの超エリート校といえます。

一方、軽犯罪を犯した少年が学ぶ全寮制の学校、工讀学校も訪問することができました。今、日本で問題となっているいじめや校内暴力、家庭内暴力はほとんどなく、窃盗や強奪が軽犯罪の大部分を占めています。また、いわゆる触法少年だけではなく、素行の悪い子、勉強が嫌いで規律の守れない子を入学させる委託管理クラスがあり、非行化の防止に大きな役割を果たしていました。

## 高齢化社会と敬老院

高齢化社会に向け、福祉はますます重要な課題となっています。北欧の福祉先進国よりは広く知られているところですが、同じ東洋で、儒教に支えられた家族意識が根底に流れていると思われる中国の実態はどうか、非常に関心のあるところでした。

敬老院は高齢者のための福祉施設ですが、日本の老人ホームとは異なり、12歳以上の希望者は誰でも入居できるところです。施設には空部屋の余裕があり、特別養護老人ホームの入所には2年待ち、3年待ちと言われるわが国の状況とはずいぶん違います。

中国では現在も、老人を尊ぶことは美德であり、子どもは老親を扶養すべきであるという伝統が息づいていることを感じました。

私たちは派遣団員として、貴重な経験と学習をすることができました。今後、この経験を地域活動に活かすとともに、中国の人々との友好をより一層深めたいと考えています。



## がんばる女性に!

男女平等をめざし、草の根の活動を続けていくうえで、活動資金は大きな課題。でも、メセナといわれる、頼もしい助っ人が結構います。企業の助成制度や財団の支援制度の一部をご紹介します。

**\*ウィメンズ・フェローシップ ～シャルレ女性奨励賞～**  
地道な努力と活動で地域・社会に貢献している女性や女性を中心としたグループを助成する。助成金は各50万円。昨年、はがきボランティアグループ、国際結婚をした家族のためのグループカウンセリング活動をしているグループなどに助成。

・事務局 ウィメンズ・フェローシップ実行委員会  
☎3239-7229

**\*働く女性のベストパートナー賞**  
男女が互いに自立したパートナーとして働く社会をめざして設立された賞。受賞者には10万円と副賞。遠距離通勤の妻を応援して家事や育児を引き受ける夫、働く母親を助ける料理自慢の大学生の息子などが受賞している。

・応募資格 フルタイムで働く女性あるいは女性のグループ  
・募集内容 日常的に支援してくれる夫や恋人、子供、会社の上司や同僚、いざという時に助けてくれる地域の友人やグループなど

・事務局 日本ヒーブ協議会 ☎3470-4320

**\*エイボン・グループ・サポート**  
2年以上の活動実績があり、女性を中心とした政治色のない非営利グループに総額200万円

・事務局 エイボン女性文化センター ☎5353-9002

**\*市川房枝基金**  
女性の地位向上、政治の浄化、国際協力などのための個人及び団体の研究調査、活動に対して、総額100万円。

・事務局 市川房枝記念会 ☎3370-0238

**\*「女性の学習の歩み」研究レポート**  
昭和初期における女性の教育、学習活動の歩みを、女性問題の視点から、正確なデータに基づき実証的に考察した研究レポートに対し、20万円。

・事務局 日本女子社会教育会 ☎3434-7575

**\*東京女性財団活動支援・交流事業**

女性の地位向上や女性問題の解決に役立つ自主活動、研究活動に対し、経費の4分の3を限度に助成。

・事務局 東京女性財団 ☎5467-1711

**\*トヨタ財団市民活動助成**  
地域や個人のあり様を、草の根の視点から問い直そうとする試みに対し、プロジェクトに200万円程度、出版に100万円程度を助成。昨年度は、「女性問題解決のための地域ネットワークづくり」等の10プロジェクトに助成している。

・事務局 トヨタ財団 ☎3344-1701



写真提供/市川房枝記念会



写真提供/東京女性財団

### 女性政策課の出版物

(金額表示のないものは無料です)

既刊

- ・北区女性白書 ～女性のエンパワーメントに向けて～ 700円
- ・北区女性白書ダイジェスト版
- ・男女共同参画社会をめざす行動計画「北区アゼリアプラン」
- ・男女共同参画社会をめざす行動計画「北区アゼリアプラン」ダイジェスト版
- ・田端文士、芸術家村と女たち ～もうひとつの北区史～ 1,200円(消費税別)
- ・第3期北区女性海外派遣回報報告書

近刊

- ・戦時下にくらした女性たち ～もうひとつの北区史～ 1,200円(消費税別)
- ・平成8年度北区アゼリアプラン推進状況調査報告書
- ・第5期北区女性大学学習記録

申込み・問い合わせ  
北区総務部女性政策課計画係  
☎3908-1111 内線2221・2222

### アゼリア13号

発行/東京都北区総務部女性政策課  
☎3908-1111 (内) 2221・2222  
企画・編集/アゼリア編集委員会  
区民編集委員  
小田原淑子・醍醐麗子  
田島加代子・節江順子  
森下えつ子・時田靖子  
鈴木れい子

表紙写真/小田原淑子  
制作協力/鯨吼社

### 編集後記

再就職をする理由は人それぞれですが、インタビューに答えてくれた10人の女性には「仕事をしたい自分がある」という共通点があるように感じました。誠実さや多少の困難があっても働き続けること、女性が働きやすい社会や家庭を作る力になるような気がします。「一生懸命な人は輝いている」「ガンダム」 이후の私の筆直な感想です。

さて、「私には」と言いつつ、娘たちの時代に期待するばかり。自分探しのようか自分つくりから始めなくては……。

「日本の最後の地下資源は、女性、しかも主婦である」という文章を読んだことがあります。資源は探して、発見して掘り出して、加工する、という過程を経ないと力が発揮できず、地下に埋もれたままです。この過程を整えることが、女性が働きやすい環境、システムを整えていくことにつながると思うのです。少しずつ女性が働きやすい制度が整えられていきますが、その動きに加速がかつて

まづか。 (鈴木)

今回は、10人の異なった分野、活躍の主婦の方々に再就職についてのお話をうかがいました。

皆さんは好きなことをやっていますか? 自分ができることをためてみたい、社会に関わりをもっとしたい、などいろいろ理由で再び働き始めました。もちろん、その道は平坦なものではなく、言葉では言い表わせない大変な苦労もたくさんあったのではないでしょうか。

けれども、今回取材を済ませて知り合った方々は皆、自分の能力と経験を生かしながらも新しいことに挑戦し、自分に力を高めていくのだという積極的な姿勢で毎日を生きていて感服していました。

このお話をお聞きして、私もこうした方々がいっしょに新鮮な気持ちで物事に取り組めるよう、仕事とプライベートの時間を上手に使っていることに感じました。この姿勢が仕事を続けられる秘訣のひとつだったので、ぜひ、私達も目指したいものです。 (鈴木)